

未利用の資源を「発酵技術」の力で魅力ある製品へ

酒井里奈さん

株式会社ファームステーション 代表取締役

休耕田を使って無農薬で米を栽培し、発酵の力でエタノールを作る。そんなビジネススキームで未利用の資源を有効活用し、化粧品原料や自社ブランド製品を開発、製造、販売しているのが「ファームステーション」だ。

「金融業界で働いていたんですが、自分にしかできない、10年、20年と取り組み続けられるテーマをずっと探していました。そんなとき、『醸造技術は生ゴミをエネルギーに変えるビジネスになる』と、東京農業大学の先生がテレビで話しているのを観て、これだ！と。31歳で再び学生になって、醸造技術を学ぶことにしました。銀行を辞めるときは、さすがに周囲に驚かれました(笑)」

それまで無縁だった世界に飛び込んだ社会人経験豊富な学生は、醸造を学ぶ一方、環境コンサルタントの企業でアルバイトをするなど、実業スキルをさらに習得。出産もこの時期に経験した。そして、「稲わらから燃料を作る」ことをテーマにしていたところで、声がかかる。「休耕田の余剰米をエネルギーにしたい」という申し出が岩手県奥州市から農大にあり、そのチームメンバーになったのだ。「本来は生ゴミから作りたかったんですが、使っていない田んぼを有効活用するのは、未利用の資源を生かす意味では同じだと、米から燃料を作る意義とニーズを知りました。何より、農家さんの前向きな意志が大きかったです」

「米由来のエタノールは、従来品より香りがマイルドで芳しい。しかし、桁違いに高額でもある。そこで、どんな製品になるかの例を自社ブランドで作り始めた。消臭スプレー、アウトドアスプレー、エタノールで抽出した桃の種エキ



スを加えたボディミルクなど。「循環型事業をしていることを伝える手段として、エタノールを使う必然性のある製品を作りました。私たちはエタノールを売りつつ、由来やストーリーも売っています。ですから、自社の商品には由来のわかる原料をできるだけ使っています。添加物や石油由来のものも入れないように気をつけています。また、製品効果の化学的根拠を出すことも、醸造科学を勉強した者

としてのこだわりです」他にない事業だけに、自らリスクを取り、商品の形にする必要がある。その姿勢が、取引先や消費者の信頼につながっていった。「今、力を入れているのは、エキスピジネスです。また都市と地方をつなげるのも、ファームステーションの役割。無農薬栽培をしている農家さんと協力して、働く女性がほっと一息つけるような製品を作りたいですね」

〈上〉岩手県奥州市胆沢にある原料米の田んぼで、パートナーの米農家とブルーベリーの規格外品を利用してブルーベリーエキスを作るなど、無農薬栽培農家とは広く提携。〈下〉「お米でできたアウトドアスプレー」(80ml ¥2,150)は、レモングラスとパルマローザの2種類。岩手産の米由来のエタノール、新潟の杉蒸留水、ヒマラヤの精油が原料。虫除けのほか、オーデコロンやルームスプレーにも使用可能。



“岩手県奥州市で栽培された無農薬米からエタノールを抽出し、化粧品原料や製品へ。循環型事業の例を、自分の手を動かして世に送り出すことで、信用につながることがわかりました”

国際基督教大卒業後、富士銀行(現みずほ銀行)、ベンチャー企業、ドイツ証券などの金融機関に勤務。生ゴミをエネルギーに変える醸造技術に魅力を感じ、31歳のときに東京農業大学応用生物科学部醸造科学科に入学。在学中より環境コンサルティング会社でのアルバイトや、岩手県奥州市との未利用米の活用プロジェクトに参加。2009年、卒業と同時に「株式会社ファームステーション」を設立。www.fermenstation.jp

Rina Sakai